

Title	松井清著 貿易理論の研究
Sub Title	
Author	岩田, 仞
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.1 (1939. 1) ,p.133(133)- 139(139)
JaLC DOI	10.14991/001.19390101-0133
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390101-0133">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390101-0133</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Limits of Land Settlement. A Report on Present-day Possibilities.  
Prepared under the direction of Isaiah Bowman. New York, 1937.

1311 (1311)

斯くの如く當面の世界的問題の解決方法として國際的移民事業が大なる重要性を持ち得ないことを明かにした點に、本書の價値を先づ認めねばならぬが、同時に或る程度まで各國內に於ける今後の經濟的發展の基礎を示すものとしても、本書の價値を認めることが出來やう。然し乍ら他方に於いて本書は、獨逸や伊太利に於ける國內移民事業を取扱つて居ない。しかも國際的移住が著しく制限され、また國內邊境地域の武装が重要視されて居る現在に於ては、國內移住がより一層緊切な場合がある。また本書は各國の人口收容力を考究するに當り、主として自然的條件及び現在の技術を前提とし、政治的・經濟的障礙を無視したのであるが、これは地理學的研究の性質上やむを得ない。將來の技術が如何に變化するか、政治上及び經濟上に如何なる變化が起こるか、而してそれ等が移民と如何なる關聯を持つか等の問題は、夫々他の學問の分野に屬する研究題目である。地理學的研究は實際の移民事業が如何に行はれるかを決定する基礎の一部分を明かにし得るに過ぎない。(vii+380 pages. Council on Foreign Affairs, New York. 發行、丸善賣價十二圓)(昭和十三年十二月二十七日)

## 松井清著「貿易理論の研究」

岩 田 仞

近年我國に於ても貿易理論の研究が漸次盛んになりつゝある。貿易現象の實證的分析に比しその理論的研究が非常に遲滞せる今日誠に慶賀すべき事である。殊にそれ等研究が主として少壯學徒の手に依つてなされ、その發展の將來性ある事を考へる時、喜ばしき限りである。此處に紹介せんとする「貿易理論の研究」の著者松井清氏も既に幾多の論作を發表され、先般ハーバラー著「國際貿易論」の翻譯を岡倉伯士氏と共に刊行された學究の人である。

本書は先づ「貿易理論の前提」の問題から始められてゐる。貿易理論の前提とは、國際間の交易が國內に於けるそれと如何なる點に於て異なるかを認識する事に依つて、貿易理論が獨立の分野を持ち特殊理論として成立するや否やの決定に關する問題である。之は從來國家の概念規定と云ふテーマの下に屢々論ぜられた。而してそれが貿易理論成立に關する基本的問題であるからして、著者が本書の序説として最初に論及されてゐる事は適宜の處置であると思ふ事が出来る。其處で検討の俎上にのせられてゐる見解は、リカード、ミル、ケアンズ等古典學派論者の「勞資の國內的移動性と國際的移動性」の區別、その亞流とも看做されるシッジウィックの「運送費の差異」、更に轉じてオイレンブルグ、レブケ等の「本位制の差異」の三者である。

松井清著「貿易理論の研究」

1313 (1313)

古典學派の云ふ勞資の移動性に關しては、或は古典學派經濟學の支柱たる勞働價值説の吟味として、或は古典學派貿易理論の根本的前提の吟味として、既に再三再四取扱はれた所である。筆者も亦嘗つて此の點に觸れた(本誌第二十九卷第八號「國際價格理論」一〇—一二頁参照)此の點に對する論難は、マクレオッド、レスリー、バジレット、ホブソン、シュツレル、ルソー、ラフリン等々枚舉に遑なく、古典學派論者自身も亦それが單に程度の差に過ぎない事を認めてゐる。

次いで運送費の在に依つて國際貿易を特色付けんとするシツジウィックの説であるが、之亦單に程度の差を問題としてゐる限り多言を要しない。運送費の問題は寧ろ古典學派の國際價值法則の修正乃至破壊として重要であり、シツジウィックに對するエッチワース、バステール等の論争が興味ある事も筆者は別の機會に(本誌第二十九卷第三號「正統學派貿易理論」二二四—二五頁)示した事がある。

著者も亦右の兩者が何れも本質的な點を突いてゐない事を認め、更に第三の「本位制の差異」を強調する學説をも、世界貨幣と地金の存在を擧げて之を一蹴してゐる。結局著者の主張する所は、之等區別が何れも表面上の諸現象を論ずるに當つては妥當性を有する事を否定しないが、本質的なものは他にあり、即ち生産條件の國內的均等と國際的不均等なる貿易理論の前提之であると云ふ。其處で此の點を吟味する事は、次いで述べられる本書の全内容並びに著者の理論體系の理解に際して重要である。著者は、「生産條件は具體的には技術及び生産要素の價格を標識として認識する事が出来る。」(二頁)と規定してゐる。併し乍ら我々は生産條件の意義に關して著者からそれ以上の説明を聞く事が出来ない。従つてそれに付て多くを語る事は不可能であるが、たゞ右の章句から、著者がその貿易理論構成に於て古典學派理論と對立するオーリン流の所謂近代理論の立場を採らんとしてゐる事は容易に理解し得る所である。

である。

さて本論第一編貿易理論の内容をなすものは、比較生産費説、國際價值論並びに資本移動の近代理論である。前者は貿易學説史上我々の持つ最初の理論體系をなす古典學派理論の根幹を構成するものであり、それに對する贊否何れを問はず貿易理論を考究せんとするものは先づそれに對して必ず何等かの解釋を下さなければならぬ。本書に於ては比較生産費説に關しては、(1)古典學派としてリカード、(2)新古典學派としてタウシツグ、ヴァイナー、(3)近代理論としてオーリン、ハーバラーを、又國際價值論に關しては、(1)古典學派としてミル、(2)新古典學派としてマシヤル、エッチワース、ヴァイナー、(3)近代理論としてバローネ、オーリン等を擧げて、その學說史的發展を説明してゐる。之等諸學派の區分は通説であり、又その代表者として擧げられた者も亦大體に於て穩當である。筆者は、比較生産費説を支持して之を勞働價值思想に依つて基礎付けんとする者を古典學派とし、その欠陥を認めつゝ然も何等かの因果的價值思想に依り比較生産費説の改修を試みんとする者を新古典學派とし、更に因果的價值思想の放棄と相對的均衡思想に依る新理論の建設を企圖する者を近代理論と看做してゐる。著者も亦之と同様の見解をとられてゐるやうである。筆者は且つて「貿易理論の發展と貿易政策原理」(本誌第三十卷第十號)なる一文を草して次の如く結論した事がある。「古典學派貿易理論—國際價格理論はその學說史的發展過程に於て、客觀的價值と主觀的價值と云ふ二つの姿に於ける因果的價值思想に依つて基礎付けられた事がある。その何れの場合に於ても、貿易理論はその價值思想からして一般的政策判斷の基準を與へ、自由貿易主義の論據として意義を有して居た。併し乍ら國際價格理論の發展方向は、均衡思想への接近であり、かゝる因果的價值思想よりの離脱であつた。かくて近代的貿易理論の到達した立場は純粹な均衡思想であつて、その内容は單に與へられた國際價格形成の機構を、一般的均衡關係

に依つて客觀的に分析する事である。若し貿易理論の内容が斯くの如きものであるとすれば、貿易政策の方向を決定する一般的原理としての意義を放棄しなければならない。(一三〇頁)と。斯かる見解も亦本書に於て採られ、基本的問題に關して筆者は全く同感である。曰く、「古典派や新古典派が比較生産説に於ける政策的使命と理論的使命との合一を主張するに對し、近代理論はこの説に單に理論的使命を與へてゐるにすぎないのである。(二六頁)」本章に於ける課題は前章の課題の補充として、國際價值論は先づ古典派に於て極めて實踐的な性格を以て現はれた。新古典派も古典派とは若干の相違を持つてゐるが、而もなほ貿易利益分割の指標としての貿易條件を重視してゐる點では古典派と同様であつた。然るに近代理論に於ては貿易條件を決定するものとしての國際價值論の役割は著しく輕視され、國際價值論は國際間に於ける商品交換比率決定の機構を説明すべき理論的使命を有するに過ぎなくなつてゐる。(九九頁)

たゞ筆者の見解からすれば、客觀的價值思想たる古典派理論から、均衡思想たる近代理論への過渡期に於て、エッヂワース、マーシャル等が一應主觀的價值思想に依つて著者の云ふ理論的使命と政策的使命との合一を企圖した事に著者が論及されたならば、一層その完璧を期す事が出来たのではないかと思考する。

本論たる貿易理論の最後は資本移動の近代理論に當てられてゐる。國際間の資本移動の問題は、古典學派に於ては貿易理論成立の根本的前提設定の爲めに否認された所であるが、近代理論にあつては寧ろ進んで之が採り上げられてゐる。我々は其處に兩理論の間に、歴史的背景並びに理論構成の明瞭な區別を見出し得るのである。本書は主としてイヴァーセンの著書「國際資本移動の理論」に依つて論ぜられてゐるが、未だ我國に同書の充分な紹介なく(筆者は簡単に書評を試みた事がある。本誌第二十卷第十二號「國際資本移動の問題」)。又近代理論の特質を側面から理解する意味に於て、讀者を裨益する所少くないと信ずる。

第一編貿易理論に次いで第二編は貿易の貨幣理論である。古典學派理論の特色の一つが一種の物々交換論である事は、その理論的性格からして當然の事であり、従つて其處で採られる貨幣理論の吟味は特に重要性を有するものである。古典學派貿易理論の内在的批判、並びに如何にして近代理論へ移行するか等に關しては、彼等の貨幣理論の立場をその貿易理論との關係に於て検討する事に依つて明白にされる。(本誌第三十一卷第七號「貿易理論と貨幣理論との論理的關係」参照)従つて著者が貿易の貨幣理論なる章を設けられた事は、著者の理論的用意の周到さに敬服する次第である。併し乍らその内容は本來的な貨幣理論ではなくして、(一)國際支拂機構論、(二)賠償支拂理論、(三)國際資本移動の機構に關する近代理論であり、前述せる國際資本移動の問題の詳論が試みられてゐるに過ぎない。其處にはイヴァーセンの見解に従つて、ソントンとリカード、ミルとバスタープ、ケインズとオーリンの對立を示しつゝ、古典派理論と近代理論との對立、特に前者が實踐性(政策的使命)を有するに對して後者に於てはそれが完全に失はれてゐる事を明示せられてゐる。更に最後にハーバラー並びにイヴァーセンの見解が付加されてゐる。貿易理論の分野にあつては、最近近代理論の擡頭と共に國際資本移動がその中心的テーマとなりつゝあり、我國に於て未だその研究が不充分なる時、右の著者の論述は我が學界に多大の刺激を與へられる事と思ふ。たゞ前述せる如く、欲を云へば著者が更に一步を進めて貨幣に關する基本的問題に迄突進んで、その見解を展開されたならば、著者の企圖せる古典派理論と近代理論の區別は一層明白に示し得たであらうと考へる。

以上の如き本論の内容は何れも古典派理論と近代理論の對立を、貿易理論と政策論との關係と云ふ觀點から一貫して述べられて居る。其處で結論として、序論の紹介の際に示した如く著者自身近代理論の陣營にあり乍ら「正し



く理解された近代理論に於ては、理論と政策論とが完全に分裂してゐる。」(二三六頁) 事、更に此の「分裂は止揚されなければならぬ。」(同頁) 事を認め、其處に「貿易理論の現代的課題」を見出して居られる。然らばその課題は如何にして解き得るか。ヴァイナー、ハーバラー等幾多の論者の努力にも拘らず、然も尙ほ依然として未解決の課題である。(本誌第三十卷第十一號の筆者ハーバラー紹介参照) 著者も亦右の問題を提起したのみでその解決を示されてなす。

最後に之に關する筆者自身の見解を述べて本書の紹介の筆を擱く事とする。從來我々の持つ經濟學特に貿易理論は、何れも個人主義原理に立脚せる事は云ふ迄もない。その限りに於てその中樞的課題は價格現象の解明である。(本誌三十卷第十號「前掲論文」八〇頁参照) 従つて理論の展開につれて價格の構成、變化は漸次詳細に分析される事となる。而して、價格現象が社會を構成する諸要素に及ぼす影響は複雑であり、その事情が明かにされ、ばされるだけ、政策的判斷も亦複雑化せざるを得ない。故に最も進歩せる近代理論に於て、自由貿易政策か保護貿易政策かと云ふ單純素朴な政策的判斷が不可能である事は當然であり、寧ろそれに満足し得ないと云ふのがより適切であらう。近代理論が喪失してしまつた政策的使命は、飽迄古典學派の意味せるが如き絶對的ではあるが單純なる政策的使命であつて、價格現象の詳細な分析による相對的ではあるがより複雑な政策判斷は近代理論に於て反つて可能となるのである。その意味で近代理論に於ても既に理論的使命と政策的使命は止揚されてゐると考へられる。たゞ古典學派に於けるが如き意味の兩使命の結合は、複雑な價格經濟が透つた物の經濟への移行した場合のみ可能である。

(附言) 著者松井清氏は本書執筆半ばにして「臨時召集」の恩命下り「研究生生活に歸るのは恐らく近き日には來な

いであらうとの豫想」の下に蒼惶の中に本書を纏められたものであると云ふ。同氏の武運長久を祈ると共に、再び學界に健筆を揮はれる日の一日も早からん事を待望する次第である。

(一九三九、一、八稿)